

2013年度

Happyくらす作品コンクール 入賞作品集

いずれも力作揃いで審査に苦慮しましたが、本紙の通り、
最優秀賞 1 作品、優秀賞 1 作品、佳作 6 作品が選ばれました。

今年度テーマ：「心に残る授業」

講義の思い出、心に響いたクラス、自分を変えた授業、目の覚めた講義、元気の出た授業など、講義を通して得た発見や感動、体験、成長などを作品にして応募してもらいました！

最優秀賞 P.1
塩田伸一
さん

優秀賞 P.2
鈴木梨歩
さん

佳作
6作品



★田中優衣さん P.3 ★中澤修平さん P.5
★福岡 彩さん P.3 ★張 美善さん P.6
★島田大地さん P.4 ★森 素子さん P.7

Happyくらすコンクールとは

学生のみなさんが青山学院大学でたくさんのことを学び、学生たちの成長を見て教職員も喜びを感じられるような、みんながハッピーになれる学びの場を作っていきたいという思い。それは青山学院大学に集う全ての人の願いだと思います。

そこで、青山学院大学での授業の思い出について学生のみなさんに作品の形で表現してもらい、他の学生たちや教職員と広くその思い出を共有できる場として、昨年度より実施しているのがこのHappyくらすコンクールです。

コンクール実施概要

応募テーマは次の3つのジャンルのいずれかから選択。

第1ジャンル： エッセーなど、文章で表現する作品。最大2000字。

第2ジャンル： 詩、俳句、短歌、川柳など、短い韻文で表現された作品。

第3ジャンル： 漫画（四コマ漫画、ストーリー漫画など）

応募作品の中から、ジャンルの区別なく優れたものを選考し、入選作品として下記の賞を授与します。

心に残る授業

大学院総合文化政策学研究所2年 塩田伸一

最優秀賞

塩田伸一

さん



教授という呼称は、物事を「教え」「授ける」ということから来ている。どの辞書を見ても、だいたいそんなふうにかかれている。しかし、である。そもそも他人に物事を教えたり、授けたりすることが可能なのだろうか。自分の考えていることを他人にきちんと理解してもらうことが、本当に可能なのか。僕はそういう疑問をかなり前から持っていた。そして、さらに言えば、先生と呼ばれる職業もかなり胡散臭い部類の生業なのではないかという疑いを持っていた。

英語の歴史には以前から興味を持っていたのだが、もともと工学系なので、なかなか学ぶ機会がなかった。ある新学期に英米文学科の開講科目に「英語史」を見つけた。ちょっと話でも聞いてみるかという、軽い気持ちで初回の講義に顔を出したのが、山内一芳先生の授業だった。

まず、「何か変な先生だな」というのが第一印象。何が変なのかと言うと、ものすごく楽しそうに話されるのである。英語史という科目は、英語の起源にさかのぼり、発音や単語や文法がどのように現在の形になったのかを記述する体系である。あるときは言葉と音の問題を扱い、またあるときはイングランドを含むヨーロッパ大陸における民族の興亡について考察する。長大な時間と広範な地域にまたがる話であり、効率よく単位だけ取ることを考えれば、まずやめた方がいい科目の筆頭である。先生は、履修に於けるそういう学生のずる賢い選択眼を理解した上で、それでもいかに楽しそうに話してくれるのだ。話の内容が古英語の文法などで難解すぎてついていけなくても、もうちょっと我慢していれば、面白い発見があるのではないかなと思わせる話し方なのである。自分の好きなことを人に話すのは楽しい。そういう楽しそうな話は、聞いているひとを深いところに引き込んでゆく。その時、情報のやりとり以上に、その楽しげな態度が感染していく。山内先生の講義は英語の歴史の面白さを伝えるのに強力な感染力を持っていた。そしてその面白さの根源には「発見」があった。

世の中には素晴らしく賢い人たちがいて、たいていの事柄については自分の頭で考えなくても、代わりに目の覚めるような魅力的なアイデアが用意されている。それに乗っかっているほうが楽だ。学生に限らず、効率優先の社会では、知らず知らずにこの潮流に飲み込まれがちだ。しかし、英語の歴史について、いかにも楽しそうに語る「山内節」を聞いていると、何となく自分で考えた方が面白そうだということに気がついてくる。些細なことでもいいから、まず自分で発見すること。その驚きと感動を、自らの経験を紹介しながら楽しそうに、あるときは授業の残り時間を忘れてしまひながら、山内先生はしゃべり続ける。

今になって思い返せば、英語史の細かいところははっきり言って忘れていた。試験前にあれだけ一所懸命に詰め込んだものは遠い記憶の彼方に沈んでしまった。鮮明に蘇ってくるのは山内先生の楽しそうな笑顔と、豊富な話題で時間がなくなり、「え、あと10分しかないの？マズいなあ…」といういつものセリフだけである。

山内先生の講義を経験して、かつての僕が持っていた教える仕事に対しての疑問は氷解した。教師の本質とは、その教授内容を超えて、問題に対しての知的態度を見せつけることにある。具体的な題材から出発するとしても、最終的には知的な生き方を示すことに帰結するのだ。好奇心を持って対象に臨み、そこに訪れる新しい発見を楽しむという態度。ひとの歩いたところを歩くのではなく、自分の道は自分で発見するのだという態度。そのような態度を生徒の前で表現すること。教えるとはそういうことなのだ。

子供は父親の背中を見て学ぶと言われる。先生と生徒の師弟関係は、擬似的な親子関係でもある。自分が理想的な「息子」であったかどうかは甚だ心もとないのだが、山内先生の背中から、自分で発見する面白さをしっかりと学び取ったという点では、他の息子たちには負けない自信がある。

先生は本年度をもって青山学院での教育からお離れになる。来年から青山で山内節が聞けなくなるのかと思うと、非常に残念ではある。だが、次は自分たちの番かもしれないと思う。先生に教えて頂いた発見する楽しさを、次の世代に伝える責任を感じている。いつの日か、そういう背中で語れる親父になりたいとの思いを支えに、日々の研鑽を積んでいきたい。

講評

山内先生の授業から単なる英語史の知識ではなく、自分自身で発見する楽しさ、知的な態度を学ぶことができたという、教育の1つの理想的な成果が描かれている。作者の優れた文章表現から、山内先生が授業をする時の楽しそうな様子や当該授業から作者が学んだことの素晴らしさが、生き生きと伝わってくる。

心に残る授業 ―科学を恐れるな―

文学部比較芸術学科2年 鈴木梨歩

優秀賞
鈴木梨歩
さん



電気、車、テレビ、スマートフォン――科学技術が生活に不可欠となった現代社会において、あなたは科学の脅威を感じたことがないだろうか。専門的な科学と目に見えない亡霊に、私は同じ恐怖を抱かずにはいられない。科学はもはや我々一般人の手から遠く離れたものになってしまった。しかし、C先生は仰った。「科学を恐れるな。科学から逃げるな。」と。

青山学院大学で学ぶ上で避けられないのが、必修科目である青山スタンダード科目である。自分の専門分野だけでなく、幅広い分野の教養を身に着ける目的で設けられている全学部共通の授業だ。それ

には四つの学問領域が用意されており、卒業するためにはすべての領域を習得しなければならない。文学部に所属する私は自然理解関連科目、つまり理系分野の授業を受けなければならないことに辟易していた。他の文学部の学生の多くがそうであるように、私も理系の科目が苦手である。

そんな私が履修したのが、地学を専門とされるC先生の「科学・技術の視点」の講義であった。初回の授業で、彼はさっそく私を驚かせた。開口一番「専門的な科学の知識を使う場面なんてないから、この授業の内容を覚える必要はない。」と仰ったのだ。そして、試験ではなくレポートの提出で成績を付けるという。小難しい単語を暗記する必要がないと分かり、私は単純に喜んでいたので覚えている。

そのレポートというのが、新鮮だった。C先生は「地球温暖化は実際に起こっていると言えるのか。君たちのオピニオンを教えてほしい。」と、私たちに意見を求められたのだ。授業では、地球の誕生やプレートの動きなど地質学に準じた地球に関する内容を取り扱っており、先生の投げかけた問いに対する答えは含まれていなかった。C先生もそれは分かっている、科学的な根拠を提示しつつ、学生の考えを聞きたいということだった。ただ自分の考えをぶつけるだけではなく、スマートに科学的データを引用することは難しかった。それには、自分の意見を支える最低限の科学知識を必要とするからだ。しかし、先生は丁寧なレジュメと添削でレポートの書き方を示してくださった。このような形式のレポートは、全授業中に二度出されたのだが、その時私はC先生の真意というものを少しもわかっていなかった。

前期中の十一回の授業も、後半では地球の話題から科学の本質に迫るものへと移り変わっていた。その最後となる講義で、C先生は水俣病問題の現代に至るまでの経緯などを取り上げた。今では正論を主張していたことになるある大学の教授が、当時は水処理業界誌で罵倒されていた事実を、私は彼の資料で初めて知った。他にも、環境汚染による食物連鎖によって引き起こされた世界最初の公害病という前代未聞の事態に右往左往する人々の様子が淡々と年表に著されていた。当時の混乱は想像に値する。先生はぐると教室を見渡してから、私たちに尋ねられた。「君たちがこの状況に居合わせたらどうしますか。」この言葉を端緒に授業のわずかな残り時間、C先生はその心内を明かされた。

「科学を恐れるな。僕は、みんなにそう言いたい。知識なんて、その時つければいいのです。」水俣病の話題も、私たちに意見を求めたレポートも、科学を様々な視点から解説された授業も、すべての根元にあったのは、C先生のこの思いだった。私はそこで初めて彼の本意を悟った。先にC先生の言葉を引用したように、履修者全員が文系学部にも所属する授業で、彼は難解な学問としての科学を教えたわけではない。膨大な科学技術とその情報が氾濫する社会で、生きるために判断し、利用できる科学というものが存在することを伝えたかったのである。もし私が1959年の水俣湾にいたとして、そこで獲れた魚を食べられたらどうか。以前の私なら、ただ黙って多数派の意見に従っていたかもしれない。それは、私が無知であり、そして無知の克服の仕方にもまた無知であったためだ。しかし、今は違う。科学的な根拠を持つオピニオンを主張したあのレポートを通して、私は自分の確固たる意志を表現できるようになった。

自分の意見が正しいかどうかは問題ではない。科学を制し、その波に流されない方法を知ったことで、私はぶれない芯を得た。現代は、もはや科学なしには生きられない時代である。科学と二人三脚で歩む人生が続くことは、避けられぬ前提だ。けれど、その前半でC先生の授業に出会えたことは、私にとってこの上ない幸運であった。科学に恐れる私はもういないのだ。

講評

作者は科学を亡霊のように恐れ、多数派の意見に従ってしまいがちだったという。しかし、そんな作者が必修科目であることに辟易しながら選択した「科学・技術の視点」の授業で、科学を恐れず根拠をもって自分自身の意見をもつという態度に至った素晴らしい経験が、作者にとって重大な出来事であるにもかかわらず、ユーモラスに表現されている。最初は楽勝科目かと喜んだ作者が、当該科目を通して生きる態度さえ変えていくことになるという展開は秀逸である。

佳作 6作品

★文学部日本文学科3年 田中優衣

「こんなこと、考えるようになったんだ」新たな自分が見つかる授業

講評

授業を通して以前の自分が考えていなかったようなテーマについて考えるようになった自分自身の成長に気付いて、少し驚いている作者の新鮮な喜びが短い言葉にうまく表現されている。

★文学部日本文学科3年 福岡 彩

思うこと何でも言い合うこの授業笑顔広まり知識広がる

講評

学生たちが自分の意見を自由に言い合うことができる授業の楽しい雰囲気が読者に伝わってくる。学生たちが笑顔で意見を交換しながら学ぶ姿が目に見える。



このコンクールを主催している“全学FD委員会”の“FD”って何？
“FD活動”って、学生も参加できるの？

FDとはFaculty Developmentの略で、授業改善のための組織的な取り組みをいいます。青山学院本学では、FD推進委員会直下の組織として現在15名の学生FDスタッフが活動しています。

大学の授業を「学生が本当に求める授業」にするため、さまざまな活動・企画を通して学生視点で授業や教育のあり方を考えています。

学生FDスタッフは随時募集中ですので、ご興味のある方はぜひ教育支援課 (agufd@aoyamagakuin.jp) まで、お気軽にお問い合わせください！



私は総合文化政策学部の学生である。いわゆる「総文生」として大学3年間過ごしてきた。「社会を文化の感動によって生き生きと価値のあるものとしていく学問」と定義された本学部では、教室で教授のはなしを聞く以外に大切な授業がある。総文の特徴は、何といてもゼミやラボアトリエといった演習授業にある。座学ではない授業だ。

私は、大学2年生になって内山隆ゼミナールに入った。このゼミは映像製作ができるゼミとして私が受験生の頃から憧れていたが、実際はただ映画をつくるだけの授業ではなくて、映像製作を通して、映像コンテンツ産業のマネジメントを学ぶゼミであった。その上で先生が繰り返し言っていたゼミ方針がある。

「学生っぽく」小さくまとまらないこと。つまり、積極的に外と交わること。

そして、「学生っぽい」自己満足な活動はしないこと。つまり、作品の出口をつくること、である。

ここが映画専門の美大や芸大や、学問として映画学だけを扱う他大学とちがう、総文ならではの映画の領域だった。この方針をもとに2012年4月、私は内山ゼミ4期生として仲間たちと共に映画をつくる授業がはじまった。

ゼミ内で唯一映像サークル映画を作っていたこともあり、私が脚本と監督を担当することになった。その他に10人のゼミ生でプロデューサー、助監督、キャスティング、美術・小道具などの役職を決めた。そのメンバーで企画、脚本会議、キャストオーディション、ロケハン(撮影場所探し)、美術制作、香盤表づくり(スケジュール)などの膨大な仕事をこなすことになった。

しかし、これだけでは映画を撮れない。撮影や照明、録音などの技術者がいなかったのだ。ここで、ゼミ方針の、積極的に外と交わる能力が問われた。私たちゼミ生は現場の経験がないから、これを解決しなければ内輪だけの質の低い作品になってしまう。けれど、プロとのツテはなかったし、あったとしてもわずかな製作資金ではまかなえるものではない。ならば、映画の専門学校の学生たちに手伝ってもらうことはできないだろうか。そう考えていた矢先、思わぬところで繋がりができた。

もう一つのゼミ方針に作品の出口をつくることがある。ただ作って終わりではなく、商業映画のように上映機会を増やすためのプロモーション活動をする。そこで既に卒業製作を完成させていた先輩たちは、多くの人に作品を観てもらうために、自ら学生映画祭を開催したのだ。「AOYAMA FILMATE」と題した映画祭のコンセプトは、「“学生でも魅せられる映画を作れる環境”をつくるための映画祭」であった。フィルム(映画)とメイクト(仲間)を掛け合わせた造語の通り、他大学の学生のヨコのつながりをつくることを映画祭のひとつのテーマとしていた。結果として、私はその映画祭で日本大学芸術学部の学生たちと知り合うことができ、彼らに撮影や照明、音声を手伝ってもらえることになった。

ゼミ方針を実現した内山ゼミ一期生の先輩たちが、私たち後輩の製作の危機を救ってくれたのだった。まだ学部としての歴史が浅い総文にも、脈々と受け継ぐべき意志があることを感じた。

それから数々の苦労はあった。ロケ地探しやキャスト探しに奔走する日々が続いた。しかし、電車内の撮影場所が見つからない時に、最後に駆け込んだ地下鉄博物館で、そこの職員の方がたまたま青学のOBで撮影を快諾してくださったことなど、人の繋がりを実感する経験がたくさんできた。

そして、ほぼ万全の準備を経て、無事撮影を終えることができた。

そして、私たちの代も今年の3月11、12日に「AOYAMA FILMATE2013」を開催し、200人以上の人たちに作品を観てもらうことができた。ゼロから沢山の人達を巻き込んで映画をつくり、そして映画祭まで自分たちで開催してしまう学部は他にないのではないかなと思う。

私の学部には「社会を文化の感動によって生き生きと価値のあるものとしていく学問」を学び、それを体現できる授業がある。

文化はひとりでは創りあげることが出来ないということ。そして様々な文化産業が発展するためには、しっかりと舞台を用意する必要があるということ。これが、私が学んだ通年4単位以上に価値のある、心に残る授業である。

講評

映画の作成という総合文化政策学部らしい授業の中で、作者たちが作品を作り上げ発表するまでの苦労が、表現が多少拙いものの、生き生きと伝わってくる。しかも、内山ゼミの先輩たちや青学のOBに助けられながら、苦労を乗り越えることができたというタテのつながりのすばらしさも、読んでいて嬉しい気持ちにさせてくれる。

★教授へ宛てる手紙 経営学部経営学科4年 中澤修平

先生、お久しぶりです。先生とは一切連絡がとれなくなってしまったので、私が歩んできた2年間にまだ報告できていません。私は今、就職活動を無事に終え、充実した学生生活を送っています。先生はご多忙な方でしたから、先生と私の出会いから振り返りつつ近況報告をしようと思います。

2年生の秋、私はなんとなくゼミを選びました。総合商社出身の先生がいるから、その人のもとに行けば何か得られるのではないかと、そんな軽い考えでした。まさかそこで人生を変えるような出会いがあるとは思いませんでした。

ゼミに入って間もなく、私は先生を心から尊敬するようになっていました。好奇心、考える力、発想力がすごい。考え方にとっても感銘を受けて、人生で最も影響を受けた人物のひとりになるだろうと思いました。公園にスイカの電灯とか、芸能人とデートできるビジネスをやってみたらどうだとか、発想が本当に面白かったです。先生に勧められて出たビジネスプランコンテストではみんなで力を合わせて優勝することもできました。たくさんの学びがあり、良い経験を積むことができました。

先生には大きな信頼を寄せるようになり、そして、ある相談をしようと思心しました。

私は1年生の時から考えていることがありました。それは海外留学。一度も日本を出たことのなかった私は、長期的に海外に行きたいと思っていました。費用を考えると交換留学が絶対でしたので、努力をして満たした応募条件。しかし結果的に面接には落ちてしまい、一度断念したのです。それでも諦めることができませんでした。諦めたら今後の人生で後悔すると確信を持てたからです。

私は必要な資料を予め先生に送っていたのですが、当日、研究室に行くとき早速言われたことがありました。「ちゃんと調べたのか？英語で探せばまだまだあるやろ。ホントに知りたいなら本気出して探さな。こんなんじゃまだまだ甘いよ。なあ。自分のことやろ？ちゃうんか？」

この言葉を先生は覚えているでしょうか。私の心にズシンと響いたんですよ。

先生はそう言うとき、新たに資料を取り出し私にその内容を丁寧に説明してくれました。そしてそれを足掛かりとし、私は計画を立て実行することができ、その年の冬には遂に海外に飛び出すことができました。相談して、本当に良かったです。

こんな人間になりなさい。

こんな人生を送りなさい。

自分で考えて、自分から行動しなさい。

もっと考えなさい。

そんなことをいつも言っていましたね。

先生との出会いが私の大学生活を大きく変えました。

この大学に入って良かったと、心から思える出会いでした。

海外に渡ってからのことを報告しますね。

私は先生の紹介で訪れた国でアルバイトや一人旅をして、世界を見てきました。実は語学学校には行きませんでした。色々考えた結果の選択でした。アルバイト探しでは70回以上応募して、面接も何十回もしましたが壊滅的な結果でした。やはり英語は覚えなないとはいけませんね。ようやく見つけたスタジアムでのアルバイトでは人生で初めてチップをもらいました。相手はなんと小学生です。態度が偉そうだったので少し笑ってしまいましたが、非常に嬉しかったのでその1ドルコインは引き出しにしまってあります。一人旅では大陸を横断してきました。写真を3000枚以上も撮ってしまいました。写真の整理が大変です(笑)

実はその後予定を変更して、東南アジアの国に渡りインターンシップを経験してきました。現地の食事で何度も体調を悪くしまして、危うく嫌いになりそうでしたが1ヶ月も経つと愛着がわきはじめて、その後は非常に有意義な時間を過ごせました。インターンシップでは新規事業の立ち上げにウェブデザイナーとしての業務や外部との交渉、また並行してブリッジSEの方の下で、受注したプロジェクトの進捗状況の管理等も行いました。言語も文化も違う人々と働くことは思っていた以上に難しいものでした。それが面白いのだと、現地の日本人の方は笑っていましたが、インターン先の社長は私専用の名刺まで作ってくれて、その150枚の名刺すべてが他の人の手に渡りました。現地に住む多くの日本人経営者の方や駐在員の方の話はどれも興味深く、私の中にあった常識はすべて覆されたように思います。

これらの経験が大きく影響し、就職活動では国際的に活躍し、日本企業を支える人間となれるような企業で働くことを決めました。非常に厳しい世界ですが、とてもワクワクする場所です。

先生に出会ってから、私の生活は非常に充実しています。昨年の経験は本当に価値のあるものになりました。そして現状に満足せず常に成長していくこと、先生が最初の講義で教えてくれたことを実践していくことが、私なりの恩返しだと思っています。

また良い報告ができるよう日々精進していきます。

それでは失礼します。

先生の教え子より

最近、不景気が続いていて、若者の就職難は深刻さをましています。まわりの人が私のことを心配してください将来、何がしたい？と聞かれることも多かったです。そのたび、私は就職して現場経験を積んでから起業しますと漠然とした考えを言っていました。

マネジメントゲームとは

今年、経営学部経営学科に入ってマネジメント基礎Aという授業を受けることになりました。経営学科の1年生の必修科目ですので、経営学の基礎を学ぶだろうと思って初日のガイダンスに行きました。しかし、授業の内容は思ったこととは全然違いました。授業はマネジメントゲームというゲームの中で学生一人一人に自分の企業を運営してもらうということでした。授業の内容を簡単に説明しますと、ゲームの中で市場は4つに別れていて、学生は自分が属している市場で企業を運営します。毎週、生産量、投資額(生産、販売、開発)、配当金、人材教育額、人材採用数などの数値を自分なり判断して入力します。また、アンケートを提出し、どこを一番中心点的に強化していくか計画を立てます。入力したゲームの結果は毎週日曜日に確認できて、学生はその結果を分析用テンプレートに記録します。また、市場別に株価順位とシェア順位データを先生が上げてくださいます。そのデータを分析して、どうしたら企業の価値を上げられるかをチームで話し合うということです。ゲームは総10期で行われ、最後の10期に1位だった企業の勝利になります。

結果は悪かったけれども

まずは、自分の企業名を決めることでした。私はスペイン語で空という意味のcieloという言葉が好きですので、milkycieloという企業名にしました。一位になりたいという気持ちで毎週結果がでる日曜日はドキドキしながら、結果を確認しました。残念ながら、私の企業成績は良くありませんでした。一番良かった業績は3位で最悪15位まで落ちたこともありました。20社がある市場で決っていい結果を出したとは言えません。

しかし、個人的には業績がいい企業のほうも経験できたし、下の企業の業績をあげるためにいろいろ工夫することもできたので、学ぶことは多かったと思います。常に情報を集めて、冷静に自分の企業の内部分析を行い、生き残るための努力をするのがどれだけ難しいことか少しながら、わかるようになりました。大企業は常に獲得したシェアを守らないといけないという大企業なりの苦痛があり、中小企業はなかなか自分の企業のシェアを獲得できないという厳しさがあることに気づきました。将来、起業したいと漠然と考えていたのはかなり甘い考えだったと反省しました。このゲームを通して企業の経営の理解が深まり、企業の基本的な活動を知ることができましたので、これからもっとしっかり勉強して将来のこともちゃんと向き合っていきたいと思っています。

天才は努力する者に勝てず、努力する者は楽しむ者に勝てないーロールプレメルレ

マネジメント基礎Aの授業、マネジメントゲームを通して経営学を実際に自分の会社に適応することができたので、楽しく勉強することができました。ほかの経営の授業を受ける時も株式資本や負債構成比率など難しそうな知識を学びましたが、マネジメントゲームでやったことだから興味をもって勉強することができました。これから学ぶ経営学も本の知識だけで終わるのではなく実際の企業の活動に結びつけて思考することができれば、飛躍的に成長できるのではないのでしょうか。そう思うと期待でわくわくしてきます。楽しく勉強できてとっても良かったです。経営学に興味をもたらしてくれてとってもありがとうございました。

← 講評

手紙形式の表現方法が、誠実な作者の心の内を鮮明に表す優れた効果を示している。一旦、交換留学の試験に落ちて諦めかけていた作者が、ゼミの先生の後押しで海外に飛び出し、人生を変えるような素晴らしい経験を積んで、たくましく成長していく姿が生き生きと伝わってくる。ゼミを通じた一人の教員との出会いが、作者の人生を大きく変えることになった事実が、教師という仕事の責任の重さと可能性を感じさせてくれる。

注) 作品で触れていませんが、作者のゼミの先生は2011年9月に病気で急逝されました。

↑ 講評

マネジメントゲームという企業経営の基本を疑似体験する授業の中で、1年生の学生がこれから4年間学んでいく経営学という学問への興味をかきたてられていく変化の描写が素晴らしい。マネジメントゲームの結果に作者が一喜一憂する姿がうまく表現されている。将来は起業するといった作者が、マネジメントゲームを通して企業経営の厳しさに気づき、これから大学で真剣に勉強していきだろうと予感させてくれる。

★心に残る授業～文化と宗教からみるビジネスエシックス～

専門職大学院国際マネジメント研究科 1Flex-A 森 素子

今から4年前に13年間努めた旅行社を退職してフランスから帰国、帰国後はフランスに本社を置く宇宙輸送会社の東京事務所で広報の仕事をしています。この4月に国際マネジメント研究科に入学しました。前期はまさに時間との闘いであり全力疾走で駆け抜けましたが毎日が充実しています。全ての講義は期待以上の内容で新鮮です。今思えば入学して1週間たった頃には既に学費の元を取ったような気分でした。自分の選択に間違いはなかった、と確信が持てるのは幾つになっても嬉しいものです。

その中でも、西谷幸介教授の「文化と宗教からみるビジネスエシックス」は、「これだ!」と思わせる青山学院ならではの贅沢な講座でした。

英語のインプット・アウトプット

1年の前期は7科目中6科目が必修で選択は1科目のみでしたが、この講座が英語オンリーの対話クラスであることに惹かれて選びました。毎回ゲストスピーカーを招いてアットホームな雰囲気の中でスピーチを聞き、ディスカッションを行いました。

まず西谷先生の流暢な英語が印象的でした。ゲストは日本人と外国人が半々で、論理的でしかも見事なプレゼンを披露してくれました。自分自身、海外で働いてきた経験からコミュニケーション能力の重要性を痛感しています。もっとも、外国人として文法的に正しい丁寧な語学力を身につけることが大切で、ネイティブスピーカーと同等の語力を目指すのは非効率的だと考えています。聞く力を鍛えるにはネイティブスピーカーの会話を聞くことが重要ですが、話す能力を鍛える上では高度な語学力を身につけたネイティブ以外のスピーチを聞くことも効果的な学習方法であり、到達目標になります。また、この講座では意見を求められるなどアウトプットする機会も多く最終日には英語によるプレゼンテーションが試験として課されました。言葉に詰まると、語学力の問題なのか、ロジックの構築に問題があったのかなどを認識する良い機会となりました。

多彩なゲストスピーカー

毎週変わるゲスト陣は、他大学の教授、プロの通訳者、LINEや電通など大手で活躍する外国人ビジネスマン、米国の法律家、そして青山学院女子短大のSherrill先生など多彩な顔ぶれでした。トピックは企業の倫理、21世紀のグローバル社会と各国の盛衰、逆差別問題、ビジネス英語の言い回し、など各ゲストスピーカーの専門分野に関するバラエティに富んだ内容でした。

中でも感動したのはキャシー松井さんの講演です。松井さんのご両親は奈良県からカリフォルニアに渡り花卉栽培で成功した方です。幼い頃から一日中休み無く働く御両親の姿を見て育ったそうで、4人の兄弟姉妹全員がハーバードに学んでいます。松井さんは現在日本在住で、ゴールドマン・サックス証券のマネージングディレクター兼チーフストラテジストとして活躍しています。「ウーマノミクス」を提唱し女性の社会進出による経済効果を定量的に示すことで女性の登用を推進しています。松井さんの話は具体的、論理的で分かり易く、話術にも生き方にも多くを学びました。

人の教育

チャレンでもある西谷先生の談話はリベラルアーツ教育の一環としてとても為になり、聞いているだけで心が豊かになりました。グローバルなビジネスを展開していく上で、互いの国の歴史、文化、宗教など違いを理解し尊重することは非常に重要です。そのためには勉強やビジネスの知識だけでなく深い教養が求められます。今回の講義では人間、宗教、文化、差別、女性の社会進出などあらゆる問題について語り合いました。この授業に魅せられた一番の理由はここにあるかもしれません。在学中にできる限り対話形の科目を受講しようと思っていたのですが、この講座は私の理想とする全ての条件を備えたクラスでした。

私はフランスでの数知れずの失敗から多くを学びました。客観的、相対的な視点が育ち、日本人としての自分を見直すきっかけにもなりました。ビジネス習慣は国によって様々です。同じ英語圏、同じフランス語圏でも国によって地域によって全く異なります。今後のグローバル社会を生き抜いていくには、まずは人間を鍛え、世界中のビジネス習慣に柔軟に対応する能力を養うことが第一だと考えます。そのために今普段から様々な国の人々との外国語での対話に慣れておく必要があります。実はゲストスピーカーとして招待した方の何人かは過去にこの講座を履修した卒業生でした。諸先輩が既に多方面で活躍しています。夢が広がります。

講評

フランスで働いた経験から、すでに十分なコミュニケーション能力を持ち、歴史・文化・宗教の違いを尊重する大切さを理解している作者でさえ、多くのことを学ぶことができた西谷先生の授業の素晴らしさが文章から伝わってくる。西谷先生の授業を通して、様々な社会問題に関する知識や英語でのコミュニケーション能力だけでなく、ゲストスピーカーから生き方まで学ぶことができたという作者の充実感・満足感が読者にも感じられる。

2013年度Happyくらすコンクールにたくさんのご応募をいただき、皆さんありがとうございました。

良い授業は教職員だけでは作れません。学生の声を反映させることで、大学の授業を「学生が本当に求める授業」にしてみませんか？

学生FDスタッフも随時募集中です！（詳細は3ページをご確認ください）

